

## 【JELS 原稿（和文原稿）の作成上の注意】

<英文原稿作成については、Guidelines for Submission of Manuscripts to JELS を参照すること>

### (1) 原稿枚数：

本文・注・文献を含めて A4 用紙に 10 枚以内（特別講演、シンポジウム・リポートは5枚以内、ワークショップ・リポートは3枚以内）とする。原稿は、1 ページ40 行とすること。

### (2) 書式：

必ず、添付ファイルで送られてきた、「JELS\_サンプル（和文原稿）.docx」を使用し、ファイル名を変更した上で上書き保存して使用すること。

① マージンは上（2.2 cm）、下（3.0 cm）、右（2.5 cm）、左（2.5 cm）に設定する。

② 文字サイズは 11 ポイント以上にする。

③ 第 1 頁の一段目は上部に 4 行の余白を取り、論文題名・氏名・所属・キーワード（語または短いフレーズ、5 項目まで）を中央寄せにして入れる。論文題名と氏名の間、及び所属とキーワードの間は各 1 行空白とし、キーワードの後 2 行あけて、本文を始める。（キーワード：メタファー、関連性理論、usage-based model のような形式でキーワードを書く。キーワードの間は半角カンマと半角スペースで区切る。）

④ 論文題名は太字にする。

⑤ 謝辞を書く場合は、アスタリスクを付け、注の上を書く。

⑥ 注は、本文（または謝辞）の後ろ（文献表の前）にまとめ、「注」とタイトルを付す。なお、MS-Word の脚注機能を使用してはならない。脚注機能を使わずに注を書くこと。本文中の注番号（上付き数字）は、ピリオドの後ろにくるようにする。

⑦ 和文原稿の場合、読点・句点は、「、」と「。」を使用する。

⑧ 文献表を含め、その他の書式の細部については、*English Linguistics* の“Information for Contributors”に従うが、abstractは不要。

(3) その他：

① 和文原稿には和文題名をつけること。また、著者名と所属機関名の横にそれぞれの英語（または原語）表記を（ ）に入れて記す。著者名の英語表記では、ファーストネーム ファミリーネームの順番で、語頭のみ大文字で書くこと（例：「日本英子（Eiko Nihon）」）。また、和文題名の下に英文題名を（ ）に入れて示す（この場合も、英文題名の中の内容語はすべて、語頭を大文字で記載すること）。

② 発表時のタイトルからの変更は一切認めないが、日本語による口頭発表でも **Conference Handbook** に記した英文題名を使用すれば、英文原稿を提出できる。なお、**Spring Forum** での発表の場合は、英文原稿のみ受け付ける。

③ ページ番号は入力しないこと。

④ 作成原稿のフォントの埋め込みを必ず行ってから提出すること。CD-ROM からの読み出し時に、パソコン環境によってはフォントがうまく再現されず異なる記号などに変換されてしまう危険性があるため、必ず確認の上、提出すること。

⑤ 論文内に図やイラストなどを使用する際には、著作権に十分留意すること。

⑥ 締め切りは、大会翌年の1月11日午前11:59（日本時間）（必着）で、日本英語学会の JELS 原稿受付アドレス（conference-elsj@kaitakusha.co.jp）に **WORD** ファイルと **PDF** ファイルを送付する。ファイル名には発表者の氏名をローマ字で記入すること（例：NihonEiko.doc / NihonEiko.pdf）。メールのタイトルは、秋の大会の発表か国際春季フォーラムの発表かに応じて、「大会: JELS 日本英子」もしくは「SF: JELS EikoNihon」と記すこと。なお、締切日時を過ぎていても JELS 原稿受付アドレスの自動応答システムによって「受領した」旨のメールが返信される場合があるが、大会運営委員会としては受領しない。

⑦ 規定に違反している原稿は掲載できない。

(2023年6月24日 改定)

## JELS 日本語執筆の場合の注および参考文献の書式について（補足資料）

JELS を日本語で執筆する場合の注と和文参考文献の例を以下に示します。外国語で書かれた参考文献については、JELS を英語で執筆する場合と同様、*English Linguistics* の参考文献の書式（2007 年度会員名簿巻末掲載）を参照して下さい。

### 注

1. 河上誓作（私信：XX 年YY 月ZZ 日）によると、以下の例は.....
2. Oba (1997)にも指摘されているとおり、.....
3. 杉本 (1998:34)では、以下のような類例が紹介されている。
  - (i) I long for .....
  - (ii) I manage to .....
4. Takami (1996:51)には、以下のような.....

### 参考文献

小泉保 (1997) 『ジョークとレトリックの語用論』 大修館書店, 東京. 松本曜・田中茂範 (1997) 『空間と移動の表現』 研究社出版, 東京.

盛岡ハインツ・梶田優(編) (1994) 『海外言語学情報』（第7号）大修館書店, 東京.

和書の場合

福岡言語学研究会(編) (1993) 『言語学からの眺望』（福岡言語学研究会20周年記念論文集）九州大学出版会, 福岡.

論文集の場合

吉村あき子(1996)『否定極性現象』博士論文, 大阪大学.

博士論文の場合

福井直樹(1998)「極小モデルの展開」, 田窪行則他(編)『生成文法』(岩波講座言語の科学第六卷), 161-210, 岩波書店, 東京.

論文集収録論文の場合

大阪太郎(未公刊)「Donkey 文の解釈について」, 未公刊論文, 日本英語大学.

未公刊論文の場合

藤田耕司(1997)「最適派生理論の最適化に向けて」, 『英語青年』5月号, 74-76, 研究社出版, 東京.

大津智彦(1993)「現代イギリス英語における目的語節を導く that の有無について」, 『論集』第9号, 41-50,

大阪外国語大学.

雑誌論文の場合

東京花子(印刷中)「英語統語論について」, 『日本英語学研究』, 日本英語出版.

雑誌掲載が決定しているが未公刊の論文の場合

塚本聡(2013)「大名力『言語研究のための正規表現によるコーパス検索』」書評, 『英文学研究』第90巻,

155-160, 日本英文学会.

書評の場合1

廣瀬幸生(1996)「Adele E. Goldberg: Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure」書評『英文学研究』73巻1号, 170-174, 日本英文学会.

書評の場合2 (洋書の書評を和文で執筆)

桐生和幸(1997)「結果述語構文の言語類型論的研究」関西言語学会第22回大会口頭発表.

口頭発表の場合

川瀬義清(1998)「認知的観点から見た進行形の意味」*KLS (Kansai Linguistic Society)* 18, 155-165.

学会等のプロシーディングスの場合

Freud, Sigmund (1905) *Jokes and their Relation to the Unconscious*, Moffat Ward, New York. (フロイト, ジグムント. 生松敬三訳『機知—その無意識との関係』人文書院, 東京, 1970)

翻訳の場合

Radcliff, Allan (1940) "On Joking Relationships," *Africa* 13, 195-210. (ラドクリフ, アラン. 青柳まちこ訳『未開社会における構造と機能』(第4章)冗談関係について) 新泉社, 東京, 1975)

論文の翻訳が本の一部として公刊されている場合